世界史コース

コースに入ったきっかけ

もともと、宗教に関心がありました。同じ宗教でも、コースによってアプローチが異なりますが、私が知りたかったのは「宗教と社会がどういう風に関わっているか」ということでした。世界史において、宗教は常に重要な位置を占めていますし、今の宗教を知るためにも、世界史から入るのが一番だと思いました。

先生に聞いた！ 西洋史分野とは

歴史研究は、生の史料に実際に触れて読み、それを通して過去を見ることから始まります。史料は、わかりやすく整えられた資料集とは全く違うのです。史料の細かいところを徹底して調べることによって、全体を見る視点が得られます。これはやってみないとわからないので、歴史をやりたい人にはぜひ経験してもらいたいですね。また、世界史コースは、文学部で一番多くの言語を扱うコースです。二ヶ国語くらい使って卒論を書く人もいます。旅行が好き、異文化を見て面白いと感じる人にとって、世界史コースはぴったりだと思いますよ。

大黒先生の研究内容

13～15世紀のイタリアにおける、読み書き能力の研究をしています。読み書きの知識がないにもかかわらず、かろうじて文字を書いた人の読み書き能力を、私は「限界リテラシー」と呼んでいます。当時、庶民の日常語の書き言葉は完成していませんでした。そんな中、魔女裁判にかけられたり、市外追放されたりといったぎりぎりの状況に追い込まれることで、「限界リテラシー」による文章が急速に出てきたのです。このような読み書きと社会変動の繋がりを、明らかにしていきたいと考えています。現在は、手書きの文字を書くことが少なくなっている時代です。この研究を通して、書く文化とはどういうものだったのかを考え直してみたいと思っています。

書く文化とはどういうものだったのか？（大黒先生）

西洋史分野 教授
大黒俊一先生

西洋史分野 3回生
市原律子さん

オススメの人

フランシスコ・ザビエル

日本にキリスト教を伝えた人物として知られるザビエル。西洋史の視点から彼の伝道を見ると、世界の一体化、という歴史の大きなテーマの一つが浮かび上がります。市大の隣の堺市に彼の名を冠する「ザビエル公園」があります。日本史と世界史の繋がりを感じに行ってみてはどうでしょうか？

オススメの人

フィデル・カストロ

このキューバ革命の指導者を挙げたいと思います。彼に特別な思い入れがあるわけではありませんが、「革命家」という今では消滅した人間類型の最後の代表者として私には忘れがたい存在です。この老革命闘士の姿を見る度に、革命も一つの「流行」であり、流行である以上終わりがあることを痛切に感じさせられました。

西洋史分野にとって「流行」とは？

「流行」とは社会がその奥底から発する声であり、社会が動き変化する以上流行にも終わりがあります。歴史研究に携わる私にとって気になるのはこの流行の終わりとその意味です。「オススメの人」に挙げたフィデル・カストロは、「革命」も一つの流行であり流行としての革命が終わりを告げたことを示しています。革命をAKB48や流行語大賞などと同レベルで「流行」と称するのは不適切かもしれませんが、これらに共通しているのは、流行にはそれが終わることで初めて見えてくるものがあるということです。最後の革命家たるフィデルが昨年末没したことで、革命や革命家も始めと終わりのある一つの歴史現象であることが明らかになりました。終わることで見えてくるものに注目するのが歴史研究の重要な役目です。その意味で歴史研究はヘーゲルのいう「ミネルヴァの梟」に似ていますが、この「梟」はヘーゲルのいうような生の凋落期（ちょうらくき）にある「灰色」の鳥ではなく、新たな認識をもたらして世界を見る目を変えてくれる導きの鳥なのだと私は思っています。（文・大黒先生）

卒論

▼19 世紀のポーランドにおけるユダヤ人酒場経営について
▼ドミニク・ヴィヴァン・ドノンのイタリアにおける美術品押収活動

授業風景

東洋史講読Ⅲ

近世、近代の東地中海に関する文献を読みすすめる授業。学生が自主的に発表したり、議論に取り組んだりする。

言語文化概論Ⅰ

言語や文化や文学の多様な姿を学び理解を深める授業。1回生向けに言語文化学科の各コースの先生によるオムニバス形式で行なわれる。

上野先生の研究内容

オスマン帝国史を扱っています。大学では外国語学部の英語専攻でしたが、違う世界をのぞいてみたいという気持ちで研究を始めました。バルカン半島や中東で事件が多かった時代でもあり、おのずと関心が向いたのかもしれません。現在は、上位概念としての「宗教」に関心を持っています。キリスト教やイスラーム、仏教などを横並びに捉える現代の認識は、近代のヨーロッパに発すると言われています。その隣のオスマン帝国は、多様な宗教、言語、民族が混在する、まさに多文化共生の国でした。ヨーロッパの影響も受けつつ、様々な価値観が混在するオスマン帝国で宗教に対する見方が19世紀にどのように変わっていったのか、これが今の研究関心です。

先生に聞いた！ 東洋史分野とは

歴史学とは、人類の登場から現在に至るまでの人間の営みと経験を、時間軸を意識しながら解明し、解釈することを目指す学問分野です。まんべんなく知識を吸収することを主眼とする高校までの勉強と違い、大学で学ぶ歴史学は、個々人の興味関心から特定の地域と時代に焦点をあて、過去の様々な社会をどう理解するかが重要になります。今とは異なる時代、日本以外の国や地域を理解することで、現在を違った視点から見ることができるのではないでしょうか。そういった意味で、歴史学に取り組むことは興味深く、また意味があると考えています。

学生から見たコース

先生や学生は、のんびりとした雰囲気ですが、やることはきちっとやる人が多いです。授業は先生によってとても特色があり、オスマン帝国やビザンツ帝国などマイナーな地域もカバーされているのは珍しいと思います。また、普段から史料を読む機会が多いので、日常生活でも言葉の微妙なニュアンスや文脈を自然と考えるようになりました。

上位概念としての「宗教」に関心を持っています（上野先生）

東洋史分野 准教授
上野雅由樹先生

東洋史分野 3回生
石本雅之さん

オススメの人

ヒュッレム

16 世紀オスマン帝国の君主、スレイマンの妃。女性の活躍を見出すことが難しい世界の歴史のなかで、知略を用いて後宮の女性が絶大な権力を握る先駆けとなった人物として注目に値します。その生涯は劇的であり、様々な解釈を交えてトルコでテレビドラマに、日本では漫画の題材になっています。

オススメの人

マルク・ラエフ

「おすすめの人」はロシア史の研究者マルク・ラエフです。特にこの方のロシア帝国の通史的著作『ロシア史を読む』は日本語に訳されており比較的手に取りやすく 30 年以上前の著作にもかかわらず、現代のロシア帝国研究にも通用するだろうロシア帝国の現実・改革・危機の骨組みをよく解説してくれていると思います。

東洋史分野にとって「流行」とは？

歴史学は過去を対象とする学問。だからこそ、研究のなかでは過去の様々な「流行」に出くわしますし、歴史家はそうした現象を、その時代を特徴づけるものとして、つまりその時代を理解する手がかりとして利用しています。それは、服装にはじまり、美術や音楽、建築様式、行楽のあり方、さらには疫病など様々です。たとえば、オスマン帝国の首都イスタンブルでは、16世紀にコーヒーの飲用が始まり、コーヒー店が急速に拡大しました。こうした現象を歴史学は、単に人々の飲み物が変化したというだけにとどまらず、屋外で人が集まって交流し、情報交換をするというような社会的側面、それに付随して様々な詩や音楽などが花開くといった文化的側面、さらに新たな産品の流行がその流通路を活性化させるという経済的側面など、様々な観点から見ていくことができます。さらに、オスマン帝国で飲用が一般化したコーヒーは、その後世界的に流行し、今日のカフェ文化につながっていったわけで、世界史的な広がりを見ていくことも、外国の歴史を学ぶ魅力の一つです。（文・上野先生）

卒論

▼20 世紀初頭英領インドの監獄における囚人の矯正について
▼19 世紀後半のオスマン帝国における孤児授産施設

L

※データは 2017 年現在のものです。

社会学実習Ⅰ・Ⅱ

3年次に通年で履修する授業。社会調査やフィールドワークを実施する。写真はフィールドワークで訪れた地域での集合写真。

フランス語圏言語文化演習Ⅰ

コミュニケーションとは何かについて、言語学、哲学、心理学、社会学などの知見をふまえ、グループワークで議論しながら進めていく授業。